

数式処理 J.JSSAC (2007)  
Vol. 14, No. 2, pp. 1 - 1

巻頭言

## 研究と開発

関川 浩\*

日本電信電話株式会社 NTT コミュニケーション科学基礎研究所

東京の中心部から鉄道の幹線に乗って車窓を眺めると、どこまでも建物が続いていて、隙間なく開発されているように見える。真偽の程は定かではないが、ある外国の方が東京から東海道新幹線に乗って名古屋に着いたとき、「どこまでが東京なのか」と質問した、という話を讀んだ記憶がある。

東京も 23 区内なら、ほとんど隈なく開発されているのだろうが、そこを外れると、鉄道や道路の幹線沿い以外は、案外開発されていない土地があるものだ。放射状に延びる幹線ではなく、幹線と幹線をつなぐ環状方向の路線に乗ると、そんな様子に気づくことがある。

数式処理に限らないのだろうが、研究の分野でも同じようなことがあるのではないだろうか。みんなが寄ってたかって研究しているところでは、新たな、かつ、難し過ぎもせずやさし過ぎもしない、手頃な問題を見出すのはなかなか難しく、気をつけないと、重箱の隅をつつくような研究になってしまう。しかし、隈なく研究し尽くされているかに見えるところからちょっと外れたり、大きな流れから離れたりすると、案外、手つかずの未開発地が残っているかもしれない。

そこが実は豊かな土地で、ちょっとした偶然により開発されないまま残っていたのか、それとも、何らかの必然性があるべくして残っている荒地なのか。今は荒地でも、新しい道具を持ち込めば開発可能な場所なのか。研究の方向性を感じ取るすぐれた感覚を持っている方なら、そこに行ってちょっと見ただけで可能性の有無を判別できるのかもしれないが、そういう感覚の乏しい者としては、実際にそこで研究し、テーマを見つけようとしてみるしかない。重箱をつつくよりはよい研究になるだろう、と信じながら。

---

\*sekigawa@theory.brl.ntt.co.jp